



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ラルフ・カドワースの「庶民院での説教 : 1647年3月31日」 : ラルフ・カドワースの説教とケンブリッジ・プラトン学派の精神
Author(s)	三上, 章
Citation	基督教學, 43, 25-28
Issue Date	2008-09-08
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46718
Type	journal article
File Information	43_25-28.pdf



ラルフ・カドワースの『庶民院での

説教——一六四七年三月三十一日』

——ラルフ・カドワースの説教とケンブリッジ・プラトン学派の精神——

三 上 章

一七世紀イギリスにおける内戦の時代（一六四二—六五）は、政治紛争と神学論争が激しく錯綜する時代であった。その時代と重なる一六三三年から一六八八年にかけて、激動の渦から一定の距離を保ち、哲学をこよなく愛した一連の神学者たちがいた。その多くは、ケンブリッジのエマニュエル・カレッジでプラトン及びその流れを汲む哲学者たちを学び、クライスツ・カレッジやエマニュエル・カレッジを中心に、教育・研究活動及び説教を行った。それにより、「ケンブリッジ・プラトン学

派」(The Cambridge Platonists) と呼ばれる。その代表的神学者と見なされるのが、ラルフ・カドワース (Ralph Cudworth) である。彼は、一六四七年三月三十一日の夕、庶民院議員一同を前に説教を語った。おりしも議会と軍隊の対立が激化し、イギリス革命の方向が急展開しつつあった時期である。

この研究発表は、そのような政局のなかで、カドワースはどのような説教を語ったのか、そして、説教にケンブリッジ・プラトン学派の精神がどのように生きているのかという問題を取り扱う。

序では、①キリスト教プラトン主義 ②「主の灯火」としての理性の重視 ③信仰と理性の統合 ④自由意志の尊重、など、ケンブリッジ・プラトン学派に共通するいくつかの特色を明らかにした。説教は、その後ほどなく、*"A SERMON Preached before the Honourable House of COMMONS, At WESTMINSTER, March 31. 1647. By R. CUDWORTH, B. D."* という題で刊行された。この印刷版の説教にはカドワースによる序文が付けられ、説教の意図が詳しく陳述されている。

Ⅰ章では、この序文を翻訳し、カドワースの思想を検討した。検討にあたり、初めに、説教の背景をなす時代の困難性を明らかにした。すなわち、当時の庶民院は、カルヴァン派とアルミニウス派、長老派と独立派、高教会主義国教会派と低教会主義国教会派など多様な熱狂者たちの集まりだった。革命半ばのこの時、穏健さと相互理解の余地はなかった。このような庶民院議員約二七五名を含む会衆を前に、カドワースの説教は語られた。

次に、序文においてカドワースが四回にわたり引用するギリシャ語原文、①「知恵のある者は、あちらこちらに飛び交う影のようだ」(ホメロス『オデュッセイア』第十歌四九五行) ②「偽教養」(おそらくケベスに帰せられる対話篇、『テバイのケベスの書板』) ③「不正の中に監禁すること」(ローマの信徒への手紙一章一八節) ④「神学の質料」(プルタルコス)、を分析した。その結果、ギリシャ的教養(パイデア)とキリスト教信仰との調和のありさまを浮き彫りにした。カドワースは随所で命取りになりかねない事柄に触れるが、自分の言葉としてではなく、ギリシャ古典や新約聖書原典からの引

用によって間接的にほのめかす。そのような手法に、彼の思慮深さ、謙遜さ、もしくは「外交能力」を見いだすことができる。

Ⅱ章では、ケンブリッジ・プラトン学派の精神を検出するため、初めに、カドワースが選んだ聖書テキスト、「もし私たちが神の命令を守っているなら、まさにそのことによって、私たちは神を知っているということ」を、私たちは知る。私は神を知っている、と言いながら、神の命令を守っていない者は、偽り者であり、その人の内に真理はない」(ヨハネの手紙二二章三、四節) から、彼がどのような所見を引き出したかを検討した。

説教は、「昨今の終わりの時代において、私たちは知識に関する多くの探求をもっています」という言葉で始まる。カドワースの時代は、科学革命、哲学革命、宗教革命、そして政治革命の時代であった。それゆえ、テーマは「知識」である。真の知識とは何か? いのちをもつ知識とは何か? よい行いに導く知識とは何か? 彼は「本好きのキリスト者」に言及し、「あたかも宗教は本の細工、ただの紙の技術に他ならないかのような」

と批判する。キリストの命令を守らぬ者は、どれほど本の知識をもつていても、心の中は無知の暗闇である。「低俗な輩」は、信条や信仰問答や信仰告白を繰り返せばキリストの知識が得られると考えるが、それはオウムがえしに他ならない。真にキリストを知るためには、「心の汚れを放逐し浄化すること」が必要である。心の浄化とは、「神の意志を行うこと」である。真のキリスト者とは、本から教えられる者ではなく、「神から教えられる者」である。

知識に関連してカドワースは、ギリシャの哲学者たちに言及する。「ある哲学者たちは、徳は教えられることができないと断じた。」ソクラテスは、徳は教えることができるかという疑問を投げかけた。同じように、キリスト者のアレテー、すなわち人間の心の内に生きるキリストのいのちは、教条主義と律法主義に囚われた教会の教師たち（カルビン主義の説教者・神学者）によってはたして教えられることができるかという疑問を、カドワースは投げかけた。

次に、「聖書の言葉からひとりで流れ落ちるいくつ

かの所見」を吟味した。すなわち、①私たちが自分の精神のあり方について検討するにあたり、その確かな基準は、「自分の生がキリストの意志に一致している」かということである。②キリストの知識、すなわちキリストを知っているということは、「いくつかの枯れた樹液のない意見という形式を取るいくばくかの不毛な考え」をもつことではない。③「いかなる理由であれ世界に罪への耽溺を許すことは、福音の意図ではない。」

これら三つの所見を述べた後、カドワースは一般的な適用を行う。①福音の精髓は聖さにある。聖さとは「信者の心の中に形成されるキリスト」である。聖さは「天国そのものの実質」である。恩寵とは「戦う聖さ」であり、栄光とは「勝利する聖さ」である。②およそ神が愛するものをすべて愛することにより、自分の意志を神の意志にまで拡大する人、それが真に自由な人である。そのような人は、神の無限の愛によって無限の自由と無限の優しさを与えられる。真の自由とは無限の優しさであり、理解の違う人に対する無限の寛容である。互いに質問する自由、疑う自由、信じる自由を認め合うこと、解釈し

理解する広さを認め合うこと、それが真の自由である。

③「最後に、もし私たちが真の改革を願うのなら、どうやら私たちはそう願っていると思いますが、この場所で、私たちの心と生活を改革することから、キリストの命令を守ることから始めましょう。」これが説教の最後の訴えである。

説教はおおかた好意をもつて受けとめられた。カドワースの説教は、戦乱の時代においてケンブリッジ・プラトン学派が目指した宗教の理念を明確に表している。彼においては、プラトニズムとキリスト教は協働すべき同労者であり、理性と信仰は互いに補完し合うべき友人であった。真の哲学は真の宗教であり、真の宗教は真の哲学であった。両者の分離は、理性と神の愛を欠いた宗教的激情か、よい行いを欠いた死せる正統主義に陥る。両者の調和と一致こそが、教派や政党の違いに還元されない宗教の本質、真の聖さ、キリストのいのちを保全する鍵である。